

御殿堰 大黒天便り



◆第七号◆

山形市中心市街地を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。



「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など「なるほど!」と思っただけの内容をお伝えしていきたいと思っと思っています。今回は第七号です。

◆節分◆

節分とは、季節の節目を指す分かれ目のことです。寒い厳しい冬が終わり春を告げ、生命の息吹を感じられる春がやってくる。その瞬間のことを示しました。春の始まりのことに立春といいますが、節分はその前日にあたります。

今の暦では二月三日が節分ですが、昔の暦(旧暦)では立春を一年の始まりとしていたので、節分は大晦日にあたりました。節分は豆まきで厄を払い翌日からの新しい一年を迎える大切な日だったのです。

節分の起源は、文武天皇の慶雲三年(七〇六)に宮中で初めて営まれたことが「続日本紀」に書かれています。その記事によると、慶雲三年には諸国に疫病が蔓延し多くの死者が出たので大いに「おにやらい」したのだとか。

宮中では官職の者が鬼の姿をして災害や疫病などの災いに見立て、また黄金の飯面に矛や盾を持った者が豆を撒きながら悪魔悪鬼を追い払い新しい年を迎えたいわれられています。



◆雑祭◆

二月二日(〜)三月二日、御殿堰では三大つるし飾りを展示致します。今回の大黒天便りでは「雑祭」についてお話させていただきます。

『雑祭のルーツ』

雑祭は桃の節句の起源は、平安時代までさかのぼります。昔の日本には五つの節句がありました。

人日(じんじつ)→一月七日「七草がゆ」
上巳(じょうし)→三月三日「桃の節句」
端午(たんご)→五月五日「端午の節句」
七夕(たなばた)→七月七日「七夕祭り」
重陽(ちやうやう)→九月九日「菊の節句」

雑祭のルーツは上巳の節句。上巳とは三月上旬の巳の日という意味で、後に日付が変動しないよう三月初三日となりました。その起源は三〇〇年頃の古代中国で起こった上巳節に遡ります。昔から季節や物事の節目には災いをもたらす邪気が入りやすいと考えられていた。川の水に心身の穢れを流して厄を祓う行事や、杯を水に流して宴を催す曲水の宴などが行われていました。季節の節目の邪気祓い行事として、皆の幸福を願う行事だったようです。上巳節は遣唐使が日本に伝えたと言われています。日本では平安時代、上巳の節句の日は薬草を摘んで、その薬草で体のけがれを祓って健康・厄除けを願ったのだそうです。

日本でも古くから禊(みそぎ)や祓いの思想や、形代という身代わり信仰があったため、それが上巳節と結びつき、上巳の節句として日本独自の文化として定着。そのひとつが流し雛で、これは自分の体を草木やわらでこしらえた人形で無事で穢れを移し、それを川に流す神事が上巳節と混じりあったもので、今でもその伝統を守っている地域があります。この節句という行事が、貴族の間では季節の節目の身の汚れを祓う大切なものでした。室町時代になると、この節句が三月三日に定着し、豪華なお雛様を飾って宮中で盛大にお祝いをするように。それが宮中から、武家社会・裕福な家庭や名主の家庭へと広がっていき、今の雑祭の原型が完成したのだそうです。

山形あれこれ ④傘福

日本三大つるし飾りのひとつ「傘福」。傘福とは、山形県酒田市周辺で飾られるつるし飾りで、笠福とも呼ばれています。幸せになってほしい「健やかに育つてほしい」そんな母たちの切なる願いを込めてひと針ひと針縫い進んでつくりあげる伝統のつるし雛です。

雑祭りと言え、雛段にお雛様を飾ってお祝いするのが一般的ですが、糸に人形などをつるす「つるし雛」と呼ばれる地域もあります。特に福岡県柳川の「さげもん」・静岡県稲取の「雛のつるし飾り」・山形県酒田の「傘福」は三大つるし飾りとして有名です。これらの地域では、主に江戸時代、女中や裕福な家庭の女性が香袋や琴爪入れなどをつくり、雑祭りが起源。やがて庶民にも伝わり、雛祭りにも飾るようになったと言われていま

す。つるし雛に使われる飾り物は単なる工芸品ではなく、延命長寿・無病息災・良縁・安産といった願いが込められているケースが多いのも特徴のひとつです。

『傘福』の発祥は定かではありませんが、江戸時代において酒田は米の積み出し港として栄え、北前航路(西廻り)を通じて京都との交流があったことから、北前船によって伝えられたものと考えられています。

また、一七六五年に酒田市の豪商・本間家三代本間光丘は、京都の祇園祭山鉾巡行に習い、山王祭りを盛大にすることによって酒田の町を活性化させようと京都の人形師に山車製作を依頼したのだとか。このとき運ばれてきた山車の上段にあった傘との関係も指摘されています。尚、この山車は酒田の亀ヶ崎城にちなんで亀鉦と呼ばれています。



山形県酒田市周辺に飾られる『傘福』以外の地域では、どのような言われがあるのでしょうか?

◆さげもん(福岡県柳川)

柳川「さげもん」は城内の奥女中が着物で残りで、子どものおもちや琴爪入れを作ったのが始まりと言われていま

す。そのうち、それらを下げて楽しむ様になり、今日に至っています。「さげもん」は、七列の赤糸に各七個の細工をつるします。その場合細工の数は四九個となりますが、子どもの健やかな成長と人生五〇年と言われていた時代に、一年でも長生きしてもらいたいという親の願い・縁起を担ぎ、五〇個という偶数では割り切れるので「さげもん」の輪の中央に大きな毬を二個下げて五

個にして飾るようになったのだとか。さげの順序は決まっています。上中段に飛ぶもの・山のもの・木になる咲くもの。中下段に水中のもの・動物・人形を基本としています。最下段は這い人形 柳川毬になるのだそうです。

◆雛のつるし飾り(静岡県稲取)

江戸時代から伝わる伊豆稲取の風習で、長女の初節句に 雛壇の両脇に無病息災・良縁を祈願して細工を吊すもの。子供の成長とともに七歳・成人・嫁入りの機会にはどんど焼きでお焚きあげしてしまう為、古いものは あまり残っていないといわれています。

桃川長寿・猿っ子魔除け・三角葉袋香袋を基本とし、五〇種の細工があります。稲取では、五列の赤糸に各一個の細工をつるし、配置はドーム型の交差した中心に一列、さげわの四点に一列づつの計五列。これを対で製作することにより計一〇個の細工がつるされます。



次号の発行は三月七日です。来月も皆様と紙面でお会いできるのを楽しみにしています。